

歴史を生かしたまちづくり

横濱新 聞

#26

平成24(2012)年3月26日発行



発行：横浜市都市整備局都市デザイン室
 横浜市中区港町1-1 TEL 045-671-2023 FAX 045-663-8641
 編集協力：一般社団法人横浜歴史資産調査会(YOKOHAMA HERITAGE)

井伊直弼像台座(上)と水泉(左下) 撮影：米山淳一

井伊直弼像台座と水泉 威風堂々

吉田鋼市

(横浜国立大学大学院教授・横浜歴史資産調査会副会長)

井伊直弼像は掃部山公園の最奥部、最も高いところにあつて、港を向いて立っている。この銅像が建てられたのは、開港50周年記念の年の明治42〔1909〕年。すぐそばにある水泉も同時につくられた。銅像そのものは大戦中の金属回収により撤去され、昭和29〔1954〕年に復元されたが、この年が開国百周年。開国に深く関わった井伊直弼であるから当然ともいえるが、この銅像の履歴は、横浜の歴史と密接に関わっている。銅像の台座と水泉は創建時のまま健在。いずれも花崗岩製の堅固な構造物で、もちろん震災にも耐えた。

彦根藩主から大老となり、勅許を得ずに開国を断行したとして暗殺された井伊直弼。彼の記念碑の建立は旧彦根藩士たちの悲願であり、記念碑を建てる土地を買い、整備し、銅像を建てたのも彼らの資金と努力による。旧藩士たちは、当初は上野公園や日比谷公園など東京に場所を求めて、早くも明治14〔1881〕年から画策していたが、強固な反対があつて、やむなく横浜にしたという。井伊直弼の強権的弾圧政策に対する恨みは強く残っていたようである。現に、明治42年の開港記念日7月1日に挙行される予定だった銅像除幕式は7月11日に遅らされて

いるし、銅像が建つた後も、像の首が切られたとかいうデマも飛んだ。しかし、地上10mもの高さにある首を切るのには並みやたいの作業ではなく、現実にはほとんど不可能。場所が東京から横浜になって、開国の父が開港の父に成り下がったと一部の旧藩士たちが残念がったともいうが、彼らは大正3〔1914〕年に、銅像と土地を横浜市に寄付した。その志やよし。これに応じて市は、この場所を掃部山公園と名付けて広く公開した。居留地にはすでに公園があり、三溪園も私的な庭園ながら一部がすでに公開されていたが、掃部山公園は文字通りの市の公園の最初のものといえる。市は震災後に隣接地を購入して公園の土地を広げ、同時に大きな整備作業を実施している。そもそも、掃部山は、それ以前には鉄道山と呼ばれていたという。この山が蒸気機関車に必要な水の供給源だったからである。つまり、この山は古くから横浜近代の歴史において重要な役割を果たしていたことになる。

さて、この台座(ペDESTAL)であるが、日本における最も大規模な石造台座の一つといつてよいであろう。台座は普通1段でできた単純なもの(ベースと胴部とコーニスからなる)であるが、これは2段構えとなつており、し

かも下段の台座は四隅が張り出しており、非常に華やかで力強い印象を与える。いかにも堂々としていて、威風あたりを払っている。その設計は妻木頼黄〔1859-1916〕、工事請負者は中野喜三郎〔1859-1938〕、工事監督は鎗田作造〔1853-1916〕。妻木はいわづもがな明治建築界の巨頭、中野は石工から出発して中野組をたちあげ、東京土木建築業組合の初代会長まで務めた立志伝中の人。鎗田は妻木の片腕の一人となった大工出身の技師である。この仕事に妻木を結びつけたのが彦根出身の相馬永胤〔1850-1924〕で、彼は井伊直弼銅像建設委員会の代表を務めていた。相馬と妻木は米国で出会つて以来、生涯親交を保っている。相馬が頭取だった時期に竣工した横浜正金銀行本店(現・県立歴史博物館)は妻木の設計であり、旧相馬永胤邸(現・カトリック横浜司教館)も妻木の設計である。そして、鎗田はこの両方に関わっている。

なお、水泉は井伊直弼の子、井伊直安〔1851-1935〕の寄付によると、水泉の背面に大きく刻字されている。この水泉は継ぎ目がなく、一つの石を掘り出してつくられているようで、これまたたいへん力強い。

慶應義塾大学日吉寄宿舍を 横浜市認定歴史的建造物に認定!

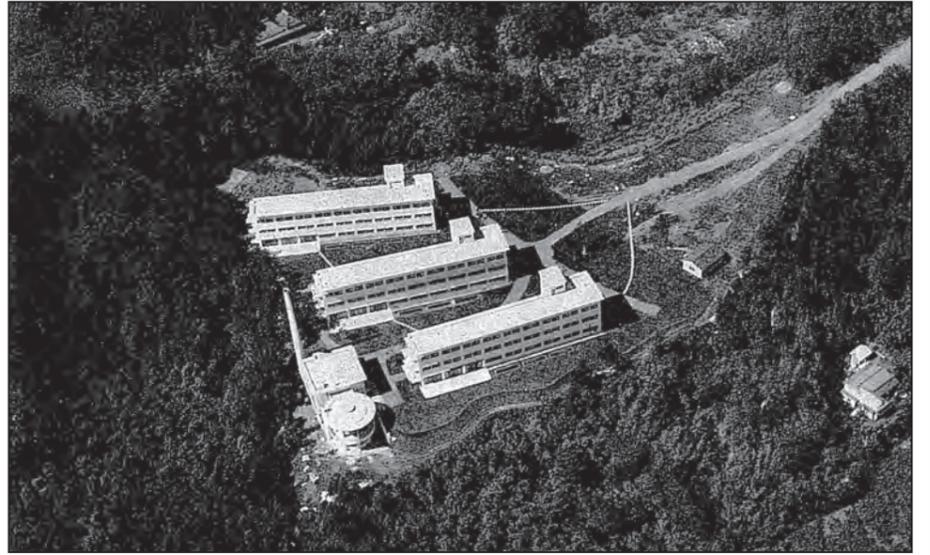
平成23年10月、慶應義塾大学（日吉）寄宿舍（南寮及び浴場棟）を、横浜市認定歴史的建造物に認定した。日吉寄宿舍は、昭和9〔1934〕年の日吉キャンパス開設に伴い、南寮・中寮・北寮の3棟と浴場棟が建設された。鉄筋コンクリート造で個室、さらにパネルヒーティングの暖房器具を備え、当時としてはきわめて近代的な寄宿舍であった。戦前に建てられた高等教育機関の寄宿舍で現存するものは数少ない中、日吉寄宿舍は全ての施設が現存し、中寮については現役の寮であるという点で希少価値が高い。

設計は日本のモダニズム建築の先駆者のひとり、谷口吉郎によるものである。浴場棟の浴室は、円形浴槽、ドーム天井、大きなガラス窓によって構成され、そのモダンかつ開放的な造りから「ローマ風呂」とも呼ばれた。さらに、丘陵地に建つ立地

により周辺の景色を一望できるプール付きのテラスとも繋がっており、当時入寮していた学生を思わず羨むような贅沢な空間である。また、寮と浴場棟の外壁は白磁のタイル張り、サッシと屋外の手すりは暗紫色、扉は鬱金色で統一されており、斬新な色使いからも、いかにモダンであったか想像することができる。

戦時中の海軍への貸与、戦後の米軍による接收などを受け、寮と浴場棟が揃って寄宿舍として使用されていた時期はわずかであった。平成24年春に、南寮は老朽化の進んでいる外観をできる限り創建当時に近い状態に復元・再生し、中寮の機能を移転する。また、浴場棟についても活用の検討を進めながら、今後改修される予定である。モダニズム建築の保全改修事例としても、貴重な存在となるであろう。

写真提供：慶應義塾



創建当初の慶應義塾大学日吉寄宿舍外観の全景



創建当初の浴場棟



南寮復元工事完成予想図

横浜海洋会館 外観保全改修工事完了

中区海岸通りと日本大通りが交わる場所に位置する横浜海洋会館の外観保全改修が行われた。横浜海洋会館は、昭和4〔1929〕年に竣工し、スクラッチタイルと、開口部・壁面を縁取る擬石仕上げが特徴

的な外観の鉄筋コンクリート造、地上3階建ての建造物である。

今回の改修は、外壁について全面的な補修が行われた。スクラッチタイルは浮いている部分の補修を行い、損傷の激しい部分については、オリジナルを元に新たにタイルを焼成し、張り替えを行った。また、海岸通りの裏面、象の鼻パーク側の吹き付け仕上げによる壁面は、改修中に発見された創建当時の色に塗り替えられた。

外壁を覆っていた金網が取り払われ、ますます、この歴史的景観を魅力的に彩ってくれることだろう。



改修後の横浜海洋会館

綜通横浜ビル 外観保全改修工事が完了

昭和5〔1930〕年に竣工し、平成6年に当時の外壁に使用されていたタイルを一部再利用して復元された綜通横浜ビルの外観保全改修工事が行われた。

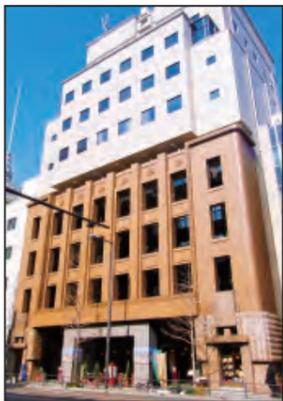
1階から4階のファサード部分に復元、再利用されたタイルであるが、今回は、再利用されたタイルの補修とともに、外壁全体について、剥離などの危険防止対策の工事が行われた。

タイルはすべて褐色であり、全体的に復元された二丁掛けタイルで覆われているが、要所には再利用されたテラコッタ装飾が施され、特に左右の入口周りにはデコラティブな印象を与えるオリジナルのタイルが集中的に用いられている。

今回の工事では、そのようなタイルが持つ歴史的価値を損なわないためにも、再

利用されたテラコッタの部分については、見た目の変化を最小限にするため、ピンでタイルを躯体に固定するアンカーピンニング工法を採用した。

昭和初期の材料を守りながら工事を行わなければならない厳しい環境であったが、施主や施工者の熱意により、本町通りの歴史的景観の価値を損なうことなく、無事に保全改修工事が完了した。



改装された綜通横浜ビル

日本大通り・象の鼻地区 都市景観大賞を受賞!

平成23年5月、横浜市を含む3団体が、「日本大通り・象の鼻地区」における取り組みが評価され、平成23年度の都市空間部門大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。

当地区は、開港期から横浜の中心であった関内地区の中央に位置し、都市の軸線を構成している。両地区を含む関内地区は、1970年代以降、都市デザインの手法により横浜の個性を活かした魅力的な都市づくりが展開された地区である。

日本大通りは平成14年に歩行者空間を拡充する再整備が行われ、沿道には事務所や公的行政空間施設が多く立地しており、歴史的建造物も集中している。象の鼻パークは横浜開港の地でありながらも最近まで港湾施設として市民が立ち入れない場所であったが、平成21年に開港150周年を記念して港湾緑地として整備され、市民に開放された空間となっている。これによって日本大通りから海を臨むビスタ*が

確保された。

これらの整備とともに、地域の団体や民間との連携によるオープンカフェや創造都市の取組みなども始まっており、横浜を代表する空間となっている。

今回、高く評価されたポイントは、日本大通りの延長に海へ開かれたアクセスを作り連続的な空間を形成したこと、また、歴史的遺構を巧みに活かしつつ、シンプルで優れた空間デザインを形成したこと、そして、夜間景観の巧みなデザイン等である。



日本大通り



象の鼻地区

*ビスタ…眺望・展望のこと

●都市景観大賞とは？
都市景観大賞【都市空間部門】、【景観教育・普及啓発部門】（主催：「都市景観の日」実行委員会）は、平成3年から実施されている従来の都市景観大賞「美しいまちなみ賞」を見直し、今年度より創設された表彰である。【都市空間部門】は、公共的空間とその周りの宅地・建物等が一体となって形成された良質で優れた都市景観を対象に、【景観教育・普及啓発部門】とともに、「大賞」（国土交通大臣賞）、「優秀賞」など賞を授与し、広く紹介することで、より良い都市景観の形成を目指すもの。

旧東海道保土ヶ谷宿に脚光!!

保土ヶ谷宿は、江戸日本橋から数えて4番目になる旧東海道の宿場で、東隣の神奈川宿とともに神奈川湊の荷揚場でもあり、様々な人と物資が行き交い繁栄した場所である。

保土ヶ谷宿の範囲は、概ね現在の洪福寺松原商店街から境木地蔵尊のあたりまでで、このうち、宿内の街並みは約2kmにわたり、今も当時の面影を伝える歴史的建造物が残されている。

宿内は、直角に曲がった珍しい形(L型)をしていて、東海道がほぼ直角に曲がる場所に、代々苧部(現・軽部)家がつとめてきた本陣があり、当時を偲ばせる



本金子屋跡

門などが残されている。また、本陣の上方寄りには、代々旅籠であった本金子屋跡があり、格子戸や通用門など、当時の旅籠の面影を伝える歴史的建造物(明治初期頃)が残されている。

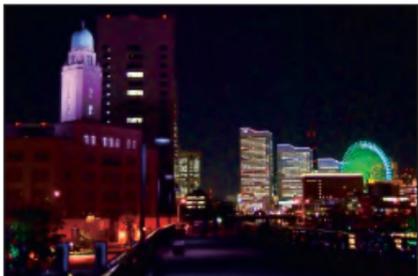
保土ヶ谷区では「歴史まちなみ基本構想」を策定し、市民協働によって、歴史・生活文化などを店先などで展示する「まちかど博物館」や、シャッターに浮世絵を描く「シャッターアート」を進め、さらに、平成19年2月には、市民が発案し、自ら整備を進める「ヨコハマ市民まち普請事業」によって一里塚と松並木が整備され、歴史的景観の復元も図られた。

市民とともに、歴史的景観の保全活用に取り組んできた保土ヶ谷宿だが、今後の東海道(国道1号)拡幅整備でも、沿道の歴史的建造物の保全活用など、歴史的資源を生かしたまちづくりの検討も進められていく予定であり、市内の東海道の中心とも言うべき保土ヶ谷宿に対する期待と関心が高まっている。

夜の横浜を彩る歴史的建造物再び

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、横浜でも臨海部の液状化などの被害をもたらしたが、歴史的建造物では、山手地区の西洋館で外壁に一部クラックが発生するなどの被害にとどまった。

しかし、その後に生じた深刻な電力不足により東京電力(株)から計画停電実施が発表されたため、3月15日にはヨコハマ夜景演出事業推進協議会からライトアップの休止を呼びかけ、銀行建築や教会など、横浜を代表する景観の1つである歴史的建造



「スマートイルミネーション横浜」の様子

物のライトアップが休止された。

計画停電の終了後、いくつかの施設で自主的にライトアップを再開する動きがみられ、市民や来訪者からも再開に対する問合せが寄せられていた。このため、8月には試験的に市の施設でのライトアップを再開するとともに、10月21日には電力事情に配慮をしつつライトアップの再開を各施設に協力を呼びかけた。

この間、最新の省エネルギー技術と都市観光とアートの融合を目指す「スマートイルミネーション横浜」が、国際的に活躍する7組のアーティストのほか、大学や商店街、市民団体などが参加して開催された。象の鼻テラスを中心とする横浜臨海部に新たな夜景が創出され、横浜を代表する景観の1つである都心部の夜景に新しい表情を加え、ライトアップの再開に彩りを添えることとなった。

旧露亜銀行 ブライダルスペースに再生!!

大正10〔1921〕年、バーナード・M・ウォード設計により、中区山下町に建てられた旧露亜銀行横浜支店(横浜市指定文化財)が、約90年の歴史を経て、平成23年9月、ブライダルスペース「ラ・バンク・ド・ロア」として生まれ変わった。

関東大震災に耐え抜き、その後は、事務所など数回に渡る用途変更を経て、平成8年以降は建物利用をされていなかった。今回、再生するにあたって、外壁のペディメントの一部保全活用、スチールサッシの修復・復元を行い、内装についても創建当初からある正面玄関の大理石の大階段、一部の柱、吹き抜けなどを活

用した空間構成となっている。結婚式場の他に、レストラン等の施設も設けており、旧居留地の歴史を継承しながらも、山下町に活性化の風を吹き込む存在となりそうだ。



改装された旧露亜銀行

提供：株式会社大和地所

“港北ヘリテイジ”活動スタート!

平成23年8月、港北区役所の行政改革推進委員会の取組の一環として「港北区歴史を生かしたまちづくりプロジェクト(通称:港北ヘリテイジ)」が発足した。区役所職員有志によるプロジェクトで、平成23年度は、まず区内の歴史的建造物の

把握を目的として、街歩き調査や所有者ヒアリング等を行い、あまり知られていない歴史的建造物の再発見につながった。今後は調査の成果等をイベントやセミナー等を通じて広報し、港北区の魅力あるまちづくりに結び付けていく考えである。

● “港北ヘリテイジ”平成23年度の主な活動

○第1回街歩き調査(8/8)

日吉本町、慶應義塾大学日吉キャンパス、綱島駅周辺、篠原台町の歴史的建造物を調査した。建物の外観調査のほか、日吉本町では認定歴史的建造物中澤高枝邸の中澤良治氏からヒアリング、慶應義塾大学日吉キャンパスではヴォーリス設計のチャペル(慶應義塾基督教青年会館)の内部調査を行った。



慶應義塾基督教青年会館

○富士食品工業長屋門(旧吉田三郎兵衛住宅長屋門)解体時調査(10/3)

「大日本博覧絵」(明治22〔1889〕年発行)にも掲載されている名家の長屋門が東日本大震災の被害をうけて取り壊されることとなったため、所有者の協力を得て調査を行った。



富士食品工業長屋門(旧吉田三郎兵衛住宅長屋門)解体前

○大倉山記念館調査(10/4)

言わずと知れた港北区のシンボリック的建造物であるが、実はまだまだ知られていないことも多い大倉山記念館。平井誠二氏(財大倉精神文化研究所研究部長)にご案内いただいた。

○池谷家住宅調査(10/18)

綱島東にある大屋根の古民家、池谷家を調査し、所有者である池谷光朗氏のヒアリングを行った。建物の来歴以外にも桃の生産、鶴見川の洪水との戦いなど地域の歴史について伺うことができた。この旧家も「大日本博覧絵」に掲載されている。特に指定等を受けていないようだが、周辺環境もあわせて貴重な歴史的建造物と言える。



池谷家住宅

○第2回街歩き調査(10/20)

「横浜市内洋館付住宅調査(2002、よこはま洋館付住宅を考える会)」の調査物件を中心に菊名、錦が丘、富士塚、篠原台、篠原西地区を調査した。滅失した建物もあったが、多くの建物が現存していた。

○飯田家住宅調査(11/18)

綱島台にある茅葺の古民家と長屋門を調査した。所有者である飯田助知氏から市文化財に指定されている貴重な建物の来歴のほか、飯田家や地域の歴史について伺うことができた。

○第3回街歩き調査(11/22)

新吉田地区、新羽地区に多く存在する蔵と社寺を中心に調査した。街道沿いに連続して蔵が集積している地区もあった。また、西方寺では市指定文化財になっている本堂、山門及び鐘

楼以外に、

地域の方に

によって小学

校から移設

された奉安殿

(現在は太子

堂)などを

調査した。

西方寺太子堂

○JR横浜線小机駅調査(1/16)

港北区内で最初にできた鉄道駅である小机駅を調査した。煉瓦積み水路、蒸気機関車時代のプラットホームの遺構等が確認できた。



JR横浜線小机駅第1番線

●プロジェクトメンバー

島田浩和(リーダー)、松本直美(サブリーダー)、江口美穂子、小堀典子、鈴木健太、小田嶋鉄朗【港北区区政推進課】

市内に残る貴重な鉄道遺産

我が国初の鉄道が明治5〔1872〕年、新橋—横浜間に開業してから今年の10月14日で140周年を迎える。この間、鉄道は全国に延伸し経済、文化の発展に大きく寄与してきた。さらに優れた機械、建築、土木等の技術を駆使して世界に誇る新幹線システムを構築し、昨年3月12日には青森から鹿児島まで新幹線で結ばれた。一時はモータリゼーションや航空機

の発達に押され鉄道は斜陽とまで言われたが、便利で環境に優しいエコな乗り物として日常生活に鉄道は欠かせない存在となった。

近年、全国各地で歴史的車両、施設、構造物等の鉄道遺産を保存・活用し個性あふれるまちづくりや地域活性化を推進する動きが活発だ。若桜鉄道（鳥取県）では沿線丸ごと文化財として位置付け駅舎、

横浜鉄道遺産調査委員会：小野田滋（JR総研）、堀 勇良（建築史家）、小田嶋鉄朗（ヨコハマヘリテージ会員）
写真と文：米山淳一（一般社団法人横浜歴史資産調査会〔ヨコハマヘリテージ〕常務理事）

橋梁等23件を国登録有形文化財としている。また、九州の肥薩線（熊本・鹿児島県）は100レールと銘打って世界文化遺産の登録を目指す動きもみられる。

横浜市内には本家本元の東海道本線、横須賀線、横浜線、東海道新幹線を始め京急電鉄、東急電鉄、相模鉄道他が貫いている。横浜は港のイメージが大きいですが、港には鉄道が張り廻らわされてい

た。鉄道と港は一体となった運輸システムなのだ。整備された「汽車道」がかつての横浜臨港鉄道であったことは広く知られている。

このたび、ヨコハマヘリテージでは、歴史を生かしたまちづくりの一環として市内の鉄道遺産の調査を開始した。

広く市民の皆様から情報、資料等のご提供をお待ちしております。



京急電鉄（旧湘南電鉄）金沢八景変電所：大規模な鉄筋コンクリート造りの変電所（昭和5〔1930〕年）は山をくり抜く形で建設されている。採光窓や庇他に洋風デザインが施されている。（金沢八景駅）



京急電鉄（旧京浜電鉄）：コンクリートブロックを使用した大断面の複線トンネル（昭和5年）は全国でも稀な存在。（日ノ出町駅）



鶴見線高架橋他：鶴見臨港鉄道として開業した当時のコンクリート製の高架橋、橋梁、駅舎他、様々な施設、構造物が現役で使用され興味深い。当会の見学会にて（鶴見—国道間）



東海道本線清水谷隧道：明治22〔1889〕年に全通した東海道本線開業時から使用されている貴重な隧道。美しい煉瓦造。電化工事に伴い断面形状が一部変更されているが、ほぼ原形を保っている。（保土ヶ谷—戸塚間）

第33回歴史を生かしたまちづくりセミナー & OPEN! HERITAGE in 馬車道

平成23年11月6日、写真家の増田彰久氏を講師に迎えた講演会（横浜市都市整備局主催）と、4つの特別公開を含む馬車道界隈の歴史的建造物を見学する「OPEN! HERITAGE in 馬車道」（横浜市都市整備局とヨコハマヘリテージの共催）が馬車道で開催された。

講演会では、東京藝術大学横浜校地（旧富士銀行横浜支店）を会場に、増田氏の写真作品を紹介しながらの講演「近代建築の見方、楽しみ方」と、建築史家の堀勇良氏、ヨコハマヘリテージの米山事務局長を交えての対談「写真から広がる歴史的建造物の世界」が行われた。

「OPEN! HERITAGE」は、日本

大通り、山手に次ぐ3回目の開催である。今回は、一般公開されていない4か所、神奈川県立博物館（旧横浜正金銀行）のドーム内部や地下金庫室、東京藝術大学横浜校地のエントランスと3階回廊、馬車道津ビル3・4階オフィス部分、北仲BRICK（旧横浜生糸検査所附属倉庫事務所）の1・2階部分が公開された。



講演「近代建築の見方、楽しみ方」



学芸員の案内によるドームの見学

●ヨコハマヘリテージについて
一般社団法人横浜歴史資産調査会（通称：ヨコハマヘリテージ）は、横浜市と「歴史を生かしたまちづくり」を協力して進めている団体です。

ヨコハマヘリテージの取組

●新・港村に参加

平成23年8月から11月にかけて、横浜トリエンナーレの特別連携プロジェクトとして「新・港村」が開催された。会場の新港埠頭は、明治期に整備されたハンマーヘッドクレーンや臨港鉄道の軌道などの遺構もある、横浜港の歴史が集積した場でもある。ヨコハマヘリテージでは、展示とスクールを開催した。

展示は関東学院大学の黒田研究室のご協力で、インペリアルビル（平成23年横浜市認定歴史的建造物）の実測調査をもとにしたパネルと模型の展示を行った。

スクールは、「新港歴史夜話」と題した7回連続講座で、多様な視点から新港地

区の歴史に迫った。平日夜の開催にもかかわらず、毎回約40名の参加があった。

また、特定非営利活動法人 街・建築・文化再生集団（RAC）との共催で、研究集会「絹物語・地域間交流から地域づくりを考える」を10月8・9日の2日間にわたり開催した。初日の研究集会には、横浜市立大学特別契約教授の国吉直行氏や中野創都市デザイン室長も出演し、群馬から横浜へと絹を運ぶ道でつながった歴史とまちづくりが議論された。2日目は、横溝屋敷や根岸の旧柳下家住宅などを巡るツアーを実施、港町ヨコハマだけでなく、横浜の歴史の魅力を体験した。



スクール「新港歴史夜話」



RAC研究集会（1日目）



横溝屋敷見学（2日目）

●文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業

平成22年度に引き続き、文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業（文化庁）の採択を受け、ヨコハマヘリテージでは年間を通じてセミナーの実施や近代建築資産に関する調査を行っている。

人材研修事業は、昨年と同様2日間のプログラムで実施した。見学会では、市内の茅葺屋根の改修工事現場を訪れ、現場監督や茅葺職人から直接、工事の手順や復元の工夫を聞くことができた。

調査研究事業では、昨年にも引き続き「山手地区」の調査を行った。地区内の全棟調査や西洋館所有者へのヒアリング調査など、山手の歴史的環境の特性把握や



新川家（旭区）の茅葺き屋根改修工事を見学

保全活用の方策を探るための調査を行うことができた。